

テスト版

草飼 稔 作品集抄

一九三二～一九四四年

※ このファイルは、ダウンロードが可能です
印刷はできません。
コピー&ペーストもできません。

※ 旧仮名遣い、ルビも原文に付いているままです。
改行も原本どおりにしてあります。

※ 赤二重線は、推敲の結果、タイトルや内容を修正、削除した
のと思われるが、その時期は不明。
青文字は、修正のため、ペンで書き添えられていたもの。

七編	短歌創造 (1931/1-05)	……………	一		
内分泌	短歌創造 (1931/1-07)	……………	二		
十月	La Neige sur les Pas	短歌創造 (1931/1-09)	……………	二	
歲月	短歌創造 (1932/2-10)	……………	三		
痼疾	落魅落魄 ^{はく} ／業／日記	椎の木 (1932/02)	……………	三	
道	La Neige sur les pas	雪	椎の木 (1932/03)	……………	四
合掌	／Guitare	椎の木 (1932/04)	……………	四	
Adieu	椎の木 (1932/05)	……………	四		
敗北の掌	椎の木 (1932/09)	……………	五		
〈自畫像〉	／歲月	椎の木 (1932/11)	……………	六	
〈自畫像	平井初波に……〉	椎の木 (1933/02)	……………	七	
候鳥	／短歌二首	椎の木 (1933/10)	……………	八	
櫻	椎の木 (1934/03)	……………	八		
詩	初浪に／落魄	椎の木 (1934/04)	青森県詩集 (下) 再録とは別作 ……	九	
渚	椎の木 (1934/06)	……………	九		
〈七草〉	短歌と創造 (1933/10 創刊号)	……………	十		
平井初浪へのうた	短歌と創造 (1934/01)	……………	十一		
霜	薔薇園 (1933/11 02)	……………	十一		
座	初波へ	府 (1934/05)	青森県詩集 (下) 再録 ……	十二	

晩餐

セルパン (年月不明)

〈海のほとり 六月二十七日〉

文藝汎論(1934/07-01)

~~右段に登る書葉~~

山河 IV

立像(1934/09)

…………… 十三

鏞 山河 VIII

立像(1935/2-1) 11

吹雪 山河 V

立像(1935/2-2) 12

…………… 十四

~~海へ 村はついでとさの二~~

立像(1935/2-4) 14

山河 II

★三月十日

古い松

立像(1935/2-9) 19

…………… 十五

作品 室内楽 I

立像(1935/2-10) 20

冬空

立像(1935/2-11)

津軽の山々

山河 VI

立像(1935/2-12) 22

…………… 十六

~~若しくは歌を葦のまゝ~~ 若き葦の歌

II 立像(1936/3-2) 24

~~寝姿~~ 室内楽 III

立像(1936/3-7) 29

…………… 十七

草飼稔新作集

立像(1937) 37

…………… 十八

國原

磁場(1935/03)

…………… 二十一

反歌

(タイトル無し)

磁場 4 (1935/04)

(タイトル無し)

磁場 6 (1936/06)

野へ

東北文学 (1935/10) 創刊号

新らしい道

新領土 (1937/1-02)

…………… 二十一

水晶のIdee	新領土 (1937/1-05)	09	……………	二十三	
花のやまは	新短歌 (1937/01)	01	創刊号	……………	二十四
前夜	前夜 II	新短歌 (1937/02)	02	……………	二十五
黄昏	前夜 III	新短歌 (1937/03)	03		
構圖	新短歌 (1937/04)	04	……………	二十六	
黄昏歌	新短歌 (1937/05)	05	……………	二十七	
黄昏歌	新短歌 (1938/07)	12			
哀歌	新短歌 (1940/02)	32	……………	二十八	
追憶のやうに	新短歌 (1941/01)	38			
花のあひだに	新短歌 (1941/)	41			
霧の日	新短歌 (1941/04)	45	……………	二十九	
海峽	新短歌 (1941/)	46			
落葉林にて	新短歌 (1941/11)	47			
その道	新短歌 (1942/06)	53	……………	三十	
哀歌	新短歌 (1942/7-6)	55			
火の山	新短歌 (1943/02)	61			
古い風	村上圭右、南猛に 新短歌 (1952/03)	4-3	……………	三十一	
哀歌	出帆旗 (1942/16-3)				
雪の日	出帆旗 (1944/18-2)				
基地抒情	防人 (1944/08/01)		……………	三十二	

水と海に反射する不気味な空間…… 彼女は貝殻の眺望に私の意志を歸伏させた。

私は海圖の餘白に處女の唇をみた…… 私はわたしの科白せりふを貝殻に刻んで海へすてたいのである。

叛かれた海峡の無節度な波。 ……バック・ストローク 私は空間の肉束に銃口をあてる。

赤い喪服を着た廃港の女たちは 渚に陰部を水鏡して欠伸する。 桃色の海圖の動かざる風景。

満月…… 発光器を失った十六の花嫁の肋骨は 珪藻となつて海底に銷沈する。

閉塞したタブレット。特別急行は麻痺して戀人の季節の速度を空間に威嚇した。

初夏。エスペラント語の聴診器を携帯したマネキンが舗道を設計する。

内分泌 短歌創造 (1931/1-07)

えーてるニ擴散スル貴女ラノ胸板ヲ 昇降スル水銀ノ秘戯 求心ニ活塞スル受精ノ變位 胚種ノ更新
ヲ計ル共體ノ解結ヲ

散光セル弗化ノ花冠 貴女ラノ試薬ヲ吸収スル觸媒リリズムノ詩情 陰局ニ折出スル乳頭ノ潮解ヲ 偏光角ノ
變貌ヲ

赤外線ヲ結ブ網膜の符號ヲ 受精セル假説ノ體用ヲ 貴女ラノ胎盤ハ矜カニ透明體 融解セル思春期
ノ原子價メ

毛冠ノ培養素メ 韌帯ヲ切斷スル不可分ノ處女ヲ 移調スル血漿プラズマノ感傷 内被膜ノ痙攣 血友ノ浸潤
ヲ

屈撓スル鏡板 愛函ノ指令 貴女ラノ視覺ヲニ照準スル拱狀帯 輻射線ノ酵母メ 分裂スル排泄ノ胞
果ヲ

乳房ニ觸レル罌粟ノ無弦琴 斜光スル性觸ノ標形ヲ 童貞ニ絶息スル表示器ノぼれる 幽婉ナル支持
器ノ擦音ヲ

調整スル處女帯ノ自慰 発泡スル洗室ノ蠟人形 側壁ニ象眼スル白薔薇ノ瓣炎 迷走スル子宮鏡ノ月
彩ヲ

十字架ニ裸生スル胚珠ノ生理 花芯ニ微笑ム恥骨ノ體勢 導火紙ニ印畫スル月華ノ標本 脚腺ニ調節
スル處女ノ擦音ヲ

羞恥スル處女ノ原葉體 充血セル假根ノ吸引 卵球ニ溢ルル感傷ヲ滲潤セル精子ノ變體 虹環スル養
液ノ魅美ヲ

玉蜀黍の葉摺れに母親がある、さわがしく、聲なく、私の呼び名がきこえてくる

疎になった林のなかにの腕がある赤錆びた掌てのひらに冬を迎へて

一坪の片隅に菊を焚いて、女つまは今日も私の寂しさのなかに瞳を瞑ちてある

玉蜀黍の葉蔭に冷たくなつたこほろぎの唄うたが女の口笛といつしよにきこえてくる

冬を待つわびしさをちつと鍬に握りしめて 十月の青空を瞳の奥にとちようとする

歳月 短歌創造 (1932/2-10)

流れのまゝ いつかみな うら枯れて 長いみち 土堤の花々
絶間なく あるが儘の 雲を投うつて 往来する 掌のすぢの河
波の中に ゆられながら 蹠の河を 海へ 均しく流れとなる
均しく 雨にうたれ 落葉の裏に わたしらの 背中にあつた
腕を擴げる 諦ひとりの陰影かげを ふるひ落すやうに 十字架となつて
身は流れに凍しみ 喪としみは倚より 行手は白く 屍衣ひつぎにまつはる
肩先に雲を投げ 肉心を摧き 日没となつて殞る 中の瀑布

痼疾 椎の木 (1932/02) 青森県詩集(下) 再録

この空地へ鴉が喪章のやうに墮ちてくる。

へわたしに皮膚では相かたちのない屍斑シブが留針ピンのやうに表情を匿
し合つてく

へ書齋の壁に今日も季節の白い忌中忌中が貼られてゐるく

業

この肉體のきれぎれは常に私の書物のなかへ雲を招い

て、

私を空の下に泪ぐませる。

NIROIR

あきらめの窓に雪一ぱい吹込んでくる。

腕が殞ちる、私の内側へ。

……そこには毀れた肉體の倫理がある。

どの頁を開いても始りのない歴史が終いてゐる。

へこの書物に相る私の喪失はれた先駆へ

日記

私の胸を砂漠にする冬、

そこで動かない日数を讀んでゐる私の落魄。

道 La Neige sur les pas

椎の木 (1932/03)

たれにもわたしに肖てゐないでせう わたしは恒も私でゐましたもの。

遠い道のりをたつたひとりの歩手はかんがへました。

わたしも詩人のやうに、自分ひとりのためかうして、足聲に匿れて歩くのと。

いいえ、わたしは詩人にも肖てゐないでせう、わたしはいつも私でしたもの

雪

みんな空しい・のあつまりではないか。

私のなかへとりとめもなく殞ちてくる諦めのかけら

合 掌

椎の木 (1932/04)

青森県詩集 (下) 再録

この掌のなかに 何がしので わたしの信仰を妨げるのでせう

わたしは 天を仰いだ そこには空が無かつた 多くのみえない雲が くらく重なつてゐた

あ わたしは ふたゝび そのかなしみを 瞼のなかへ とぢなければならなかつた

誰れも わたしのなかには ゐなかつたのだ みんな 空のやうに なんにも 考へてゐないのだ
けれど 何がわたしの掌のなかに しので この信仰を 妨げるのでせう

Guitare

溜息のなかへ 涙を さまざまな 音色にかくして おまへは Guitare

たれなの わたしの 溜息のなかで 隠れん坊してゐる 稚いさい かけ

・みんな忘れ易いスクラップ ひらかれた頁は日付のない めくり暦だった

あなたの文字のなかに わたしの諦めが たれもみることのできない色にかくれて わたしのなかの 一ばん大切なところへ 掌すじのやうに 流れ込んで仕ひました あなたの言葉が 私の肋骨を 泡沫のやうに くまどつて……流れにとり巻かれたわたしは 死人のやうに 確つかり 黒い枠にしがみついて 掌をあはせました

みんな的もなく 流れてゆきます 忘却のやうに どこかへいつて消ひます わたしはもう泣きません わたしの掌は あなたの泪なんか 滾れる手すぢを どこにも持つてゐません へだのに あなたの泪は ハンカチのやうに わたしの頬を ぬらしてしまひます

わたしは かうして文字のなかへ 泪なんか流すことを やめませう 静としてゐても 諦めの油へ黒い枠をはめて 言葉は刻のやうに 流れていきます ふりかへつて みねばならないこともみんな そのやうに 再びかへりません ふたりに 歩いて来た道も川のやうに ながれて行ひました ・も ・もないところへみんな

みんな むかしのやうに 流れてしまへばいい Adieu
諦めのへだよりは刻のやうにわたしを 遠ざかつていきます あゝけれど かうして書けば書くほど わたしの胸に近づいて むなしくなつてくる別れのことば……
そうしてまた わたしのなかへ流れてくる みえない文字のきれぎれが 骨片のやうに 狭い肋骨にひつかつて わたしのなかへ とゞまつて しまふ

いつまで書いても 同じくりかへし かうしてペンを握つてゐる手が鴉になつて 白い紙のうへをつゝきながら 啞！ 啞！ と空しい歎息を叫び その聲がまたわたしの言葉を空に 羽搏いて飛ひ その空にむなしくしてしまふ また 何もなくなつたわたしの内側を わたしの眼のやうになつて 猜忌ぶかく覗かうとするのです あ紙はここで切れます そのやうに 本當にここできようなら

敗北の掌

椎の木 (1932/09)

樹々のそよぎの中で　ひと時　風が　わたしの背中を
駆けめぐった。やがて　雨がくるであらう。漂れ去らな
い　前額わたしの雲。わたしは掌を差しのべる　救を求めるや
うに。

雨。雨はわたしの背中を　悔恨のやうに叩く。掌の黄
色な河に　諦めの影を投うげて　あらぬ方へ　流れはぢめ
る。すべては　そのやうに　わたしの指先を　泪となつ
て　滴りおちるのだ。

わたしは索した　諦めの行衛を　たゞ私ひとりの指先へ　身
に付いて　ふたゝび　みえだすことのできないものに
觸れようとした。しかし　わたしの指先は　溜息のそば
の純い焰のやうに　喪しよしい色で　わなゝいてゐた。わた
しの肩は　動かない雲の下で　十字架のやうに　掌を下
げることが　できなかつた。

*

たとへ　卻くことが　できようとも　背中かたは斷崖。
わたしを　抜けおちるに　ふさはしい喪かなしみの瀑布。

*

わたしは　掌をひっこめねばならない。そうして　胸
の扉を閉す。喪しみに蠶食された肋骨。そのやうに　格
子の笹つた　生れ乍らの　狭い病室。もはや　いかなる
時刻も　遁にげ去ることはできない。肋骨にからまる忘却
のかけら。そこでまた　諦めの咳が　いくつも　時計の
硝子となつて　足下に散亂した。たゞ私ひとりのみえない足先
は　わたしに傷つく　すがるべき掌もまた　搔きあつめ
る指先に傷つく　ふたゝび　繰ることのない時刻を　む
なしく　くりかへす　掌の文字盤。

へ　振子ハ動イテモ孤獨ダ　へ

〈自畫像〉 椎の木 (1932/1)

やがて その前額は 墓標となるであらふ
やがて その皺は 碑文となるであらふ

*

つねに わたしの背中に 匿れてゐる人。

氷の張りつめた 眼鏡を 懸けて

苦悩の所在を 示すやふに

わたしの後頭部を 叩く。

*

夜毎。わたしは鏡の裏をかへす。そこには透明な死面が、
わたしの内側を 知りつくした もののやふに 空をむ
いてゐる。なに人も ふれることのできない、氷
柱花のやうに、それは潔くしい苦悩のかたち。そして、わたし
の脊椎をくだり、夜毎。ただ諦ひたしの 後頭部を、擁ひてゐ
る。

*

雨に濡うたたれながら、終日、わたしは後庭に立ちつくす。
絶望が、一本の楸となつて、わたしの中に、突き樹つ
てゐる。

やがて、わたしは自らの、墓標となるであらう。

歳月

流れのまゝ いつかみな

うら枯れて

長いみち

土堤の花々

やがて この前額は 墓標となるであらふ
やがて この皺は 碑文となるであらふ

*
つねに 私の背中に 匿れてゐる人。

氷に鎖た 眼鏡を懸けて 苦惱の所在を示すやふに
私の後頭部を叩く。

*
夜毎、わたしは 鏡の裏をかへす。そこには透明な死面が わたしの内側を 知りつくしたもので、
やふに 空をむいてゐる。なに人も ふれることのできない 氷柱花のやふに。

それは潔くしい苦惱のかたち。夜毎、わたしの脊椎をくだり ただ諦の 後頭部を擁へる 宿命の
皿に似て。

*
雨に濡たれながら 終日 わたしは後庭に立つ。

絶望が 一本の槓となつて わたしの中に 突き樹つてゐるのだ

*
やがて わたしは 自らの墓標と朽ちるであらふ。

候鳥

椎の木 1933/10

越えてゆく 世の家々の屋根は霜……飢えて
やぶれて わが咽喉は 季節はずれの蹄聲
ぞ。むなしく身内をかけめぐる。むなしく空
におちてゆく。

短歌二首

女郎花 桔梗 撫子 藤袴

尾花 萩 葛花

もはや きみの裾に
にほいを添へず

木枯ふく

うつせみは

きみの裾に似てもはや

何ものゝうたも舞はしめず

凄じい北風が何もののにほひも舞はしめず
に、家々の裾をあらはにして、みえない雨に
落穂をたくさんひつかけた。柵のするどい枝
先が、冬の日の低い陽ざしに荒々しくゆれて
ゐて、その根元に見えるとほい山脈の青みが
斑な雲をみせて、白波を反立てるやうに、北
の海にうねり走つてゐた。

*

私は幾枚も刈田を渡つた。稲妻のやうな家
系に添ふて、切株を踏みしめて、いくつもの
畦畔に躓いて。そのたびに私の裾は雪どけ
の泥にまみれて重くなつた。左右の川面に鴉
が啼いてゐた。鴉が嘴をひらくと、低い空の
音をたてるのだらう。私は思ふ……かつて私
も父の前で、そのやうな胸をひらいたことが
あつたと。老いた父はいつも爐を距て、古城
のやうに構へてをり、その言葉には櫻の散る
匂ひがあつて、足跡をもちたくないためにこ
とさら、吹雪の中を駆けた私の肩先に、それ
が切なくぐりかゝつたと……。

*

春はまだなのか……。私の背中には妻とな
るべきお前の胸があるのに、いつの陽ざしに
もたよらない肉親の言葉によるめて、泥に
まみれた私の靴は、初波よ、家具をひきづる
やうに、こんなに重いのだ。

*

陽の光に羽搏く鳥をとらへるものやうに、
柵の亂木が網のやうに枝を差し交せてゐる。
山脈に下肢を真似て海に走るひとは誰である
か。ひといろに青く澄むだ空の上に、鉄の音
をたてゝ。小鳥はそのきしみから囀りだすだ
らう。そして、やがてふたりの瞳の中に輝く
果^みを啄むだらう……。

*

そういふ思ひの了らぬうちに、私はあはて
ゝ空を蹴つた。裾ばかりの風と、低い陽ざし
と、切株などに躓いて。荒い田面にうつ伏せ
になりながら、次第に、じぶんの胸に判つき
り、父の背中を意識していつた。

*

人の世のゆきづりを吹く風は、いつの日も
人の背と田面のけぢめなく、空の彼方へもち
去るといふ……。

詩

初浪に

(権の木 1934/04)

妻戸はあらぬものにきゝ耳をたて、おびえてゐた。
時計の振子をとめて、お前の吐息は、私の膝に寄りか
かった。

ストオブの中で、お前の腕は、つらゝに似て、美はし
いコロナを見せた。

私の舌は重く、しのびやかに、植込みの雪折れの音
を、お前の唇にはこんだ。

さりげなく前髪をすかすと、波を荒立てた海の、夜明
へだつた。

落魄

(権の木 1934/04) 青森県詩集(下) 再録とは別作

もはや包丁のにはいはししない。

女の股にまぎれて 薪は妻戸を蹴つてうせたらう。

他人よまひじは神をまねて、食膳に一握の鹽をしめした。

明方のストオブには、雪がいつぱい吹込んでゐた。

渚

(権の木 1934/06)

ただむきな初波は徒に心臓を打つのみだ。私の
頭髮の中に泡立つものの問答よ。 私は今日さり

げなく海草を噛むことを覺えた。 差し寄る波に

躓こころいてはならぬ。 海底つみぞの言葉に何んでひとの情

を恃たもまうぞ。 さりながら、私はまだ波の飛沫しぶきに

濡れた掌に砂を拂ひ、 名をもたぬこの肩を、 夕

かぜに消えてゆく陽ざしの中へみとらうとする。

…… ざわめく波のかたちは何處にもある、 そ

のやうに崩るるものの中に身を置いて、 私のし

着に腕とほす切なき聲は誰のものか。 頸折れ

た向日葵のゆるる海を胸にして、 私は徒に貝殻

を叩く音のみを聴いた。

〈七草〉（短歌と創造 1933/10 創刊号）

こがらし この身を倒し この名をとどめ 荒々しく 昔のひとの溜息かへす

女郎花 桔梗 撫子 藤袴 尾花 萩 葛の花 もはや きみの裾もすそに にほいを添へず

木枯ふく うつせみは きみの裾に似てもはや 何ものうたも 舞はしめず

きみの泪 わが咽喉を露す 五年のむかしの かのひとの呼名 かへりくるいま

こがらしや 去りゆくひとの まへうしろ いづこの途の旦暮あけくれも

空しく叡知ちえは抛はなつものか

この邦くにの 幾千の河 かのひとの背をうつし 叡知ちえを映なげ 海も知らずに 流れしものか

束の間に ほぐれゆく時の 移り香に 落穂を噛みて 切株を踏み われは歩まず

冷え冷えと 足下の流れに するどい枝先を映し 空を映し 去りゆくひとの 裾をうつす

水の面の隅々に 波紋をよせて ふたたびは浮かびあがらぬ落葉を真似

あはれ 秋に命をすてん

〈平井初浪へのうた〉

(短歌と創造 1934/01)

あはれ男 雲の中に生み棄てられて 女の舌の空に 流れゆく 情もたぬ と
立ちかへり わが裾めぐり 去らぬ別れのたなごころ いまもなほ肩の 塵をはらはず
ついに 陽のありかさへ示し得ず ひまわりの 枯れし根なぞ 踏みゆくらむか
ふりかへる 左右の肩は 目にみえず 枯れしひまわりの頸おれて ゆれをり
その影より 肢ぬくために 胸底の灯を消して 闇のありかへ にげゆくらむか
壁も床もなき かたむける戸口より 暮れかゝる海のみ見ゆるわが 明方なりや
氷雨の下の この耳に 風に きこえぬ哀歌は いまもなほ 女のみうたふべし
知られざる方にかたむく 陽の下の わが濡れし衣手に匂む 女はひとり
青空に立つひとの胸に 弓をはるいとなみも荒き厨べの壁を刷く 夢に了はりし
棘ひそめし うたの一つ一つを 舌にはこび 男はひとり 食器をくたく
在りうべき わが名にあらず 人に知られぬ歌びとは 青空かけて老ひゆくらむか

霜

(薔薇園 1933/11 02)

あさなあさな 荒々しく背戸を蹴り 立ち
去るひとの裾……。その後の 野いばらの生籬
に そむしきひとの 齒よりもするどい霜が
束の間のつながりのやうに 白々と添ふて
ゐた。そのときわたしの唇はふと 冷やゝか
な初波の遺言の舌にふれて 苦々しい吐息を
洩した。
……シートと霜。と。

秋の日の低い日射しをうけて私の目をさます
ところは恒に薄氷の上だつた。

侘しい古風な花にまみれて私の眼眸はけふも
遠い山脈に向かつてゆれた。

もはやいづれの庭にも人の情はたのためぬと知
つた。

絶望は風より早く枯れた枳殻の垣に添ふて

海へ走つた。

晩餐 セルパン (年月不明)

退きながら行きつくす 空を飾ることばで 別れを告げてゐる。

掌をさがす、卓の上に雪が吹き込み めいめいのナイフをかくす。

うしろ姿で 盃を差しのべる、また新しい崖をみせられてゐる。

食事が終る、いくつもの瀧の前にて ほろび易い旗をみせあふ

かへりつかぬ、肩先だけのこされて けはしいめぐり曆をみあげる

〈海のほとり 六月二十七日〉 (文芸汎論 1934/07-01)

海は荒れて惟ゐて、お前の齒並も白かった。飛沫を浴みる岩のあひまあいひまに、海猫はもう鳴き仕舞ひだらう。とほい岬はときたま波頭にかくれ、日暮れとなれば、人は憂氣に砂地を踏んで別れの言葉を告げる。それなのに二人の裾はまだこんなに濡れてゐる。お前はせはしげに髪のみ梳いて、せつなさをかきあげながら、……砂にまみれてしまふのは、かへる人の言葉なのでせう。こんなおそろしいことがあるのですか、過失の中心をのぞいては何ものこらない……と、オフィリアの頭髪に言葉をむすぶ、ひととき、膝をくづして、濡れた掌の砂を示す。

へああ、摘み花をすてゝ、稚けな子守唄をうたひ、黄昏の枳殻の垣に沿うて、かへりゆく人の子よ。彼女は私の臥床にひきとる波のかたちだらう。私の醜さを、海の風に指をさしのべて、お前ははやくも、かへる人のしぐさを真似る。私のやうに、悔恨に似て額に垂れる髪のあひまから、まばゆい入日のまなざしをうけて。

脆いほ芒にまぢる人の嘆きを 荒地の石ころに蹴りながら こちらむけといふ昔の聲を聞ひたやうに思ふ。

吐きだせぬ苦^{にが}さを いつまでも舌が捉へてゐて その後から愚なことばが 彼の行為にけつまづいてきた。

枯れた藪をかきわけて その脆い言葉を さりげなく石の上に置いて 私もかへる時がなければならぬ。

食事をする老人の背後で 空を語る野心の佗びしさを 耐へてゐねばならない。

葱畑は寒く とほい砂地が人々を晦^{くら}くする。私は背後で石を切る人々の聲を聞ひた。

時雨に濡れながら 私も君たちと別れるため 古い荒地のみえる石段の上に 少し咳こんで 登つてきたのだ

鏞 山河 VIII

立像 (1935/2-1) II

ここはどここの港であらう。

符號のない海圖をみつめていると

老ひた船が鹽を積むで

水平線を遠くみせる。

*

語るものではない。

時代の傍にある古い谷間に

今日なほ雪の降り^おてゐることを

瀧の前で見てゐねばならぬ。

吹雪 山河 V 立像 (1935/2-2) 12

また暖爐に雪が吹きこんでくる。古い壁に枯枝の折れる音がして、釣洋燈ランプの火屋ほやに あなたの乱れた頭髪かみのけが映る。

その枯枝に雪崩の音がのこつてゐるか。 食膳にさしのべたあなたの手に、空の曇りはひといろにかつた。

食器棚の方へ落葉松が摧けていった。人はめいめいの寒さの中で詭みをなした。私は徒に水をくむでみた。

老人は林に向かつて歩いていった。頑な戸を後ろにして、吹きつのる冬のコロナコロナに、村の洋燈ランプはいよいよ揺れていった。

海へ 村について その二 山河 II 立像 (1935/2-4) 14

荒く戸を閉むるのは誰ぞ。瀧のごとく聳える人の言葉は無かつた。けふとぎすました刃物の上に女の臍はきのしろさを見た

雲はやまず。告げる言葉は脆かつた。錆び荒れたボイラに あるひは懸崖の菊に 吹雪の空も近づいてみた

海へ あるひは飢ひた老女の表情へ 人の言葉は枯穂のごとく垂れ すべての杜の中から石の割れる音がきこえてきた。

★三月十日 上野にて共に會せし中村と簇におくる歌

そこでも隣の人の話聲がきこえすぎた。吊りランプの古風にゆれるのは わしがいま乗つてゆく地下鐵道が 食膳にひびくからだよ……

古い松 (立像 1935/2-9) 19

何かあるか おれの齢を 稲妻がいそいで過ぎ老ひた頭毛にさぐりを入れる
稲妻は劍をふりあげ あちこちの空をくたき おれの周圍に血をしたたらす

どこかの古い松に似た あなたの言葉のおもちに 切なく また稲妻が刻みこみます

葉の上は舌を秘くし 心の底に言つくり おれも 人に知られず鬼の子と住む

おれの中にも山河がつづき 傷ついて寒く林の底へ いなずまの圖式で歩いた

作品 室内楽 I 立像 (1935/2-10) 20

山と花のあひだに 刺のある空が走りすぎ あなたの手に 剃刀をにぎらせた

砌のうえに眠りながら 膝にちかく菊の花畑をひきよせ 指のあひだに稲妻をみた

冬空 (立像 1935/2-11)

冬か、いまも 軍鶏の眼は空につぶれ 乏しく 古び わが膝に血をしたゝらす

おほかたの 情をはなれ 囊の下の石の中に きゝ耳たてゝ わが膝もきびしく老ゆる

*

生々しい血のしたゝりを蹴りながら 挑みあふ軍鶏の眼にも冬の空はうつるらし

頂いたゞきへ 狂った和愉をつくりあげ 知らぬ面つらして胸をかくす 吹雪！

空へ いがみ合ひながら 誰れ彼れを罵つて こいつ！ たゞものでない

頂いたゞきへ また盲人の さまざまな貌があつまつてゆき あゝ 刃やいばをにぎる

~~若き葦の歌~~ 若き葦の歌 II 立像 (1936/3-2) 24

氷の下に 空の映りだすのはいつだらう、川はどちらへも 流れてゐない

波のやうな舌であつたな……絶崖を見あげ、膝のあたり海を手さぐる

空へ網をさしだすかたちで 今日も 凡庸な挨拶を 肩のあたりでくりかへすか

て

空にも雪が降つてゐれ つひ食卓に後姿でのこされ 隣の人のナイフを握る

抜くつるぎではなかつたか 乏しく歌ふ葦のこと わたしの咽喉につらゝをつくつて

かへす言葉は空に近く けさ 人はめいめいのシイツの上に 雪崩をみせたといふ

カルタあそびか 顔の取引か 果無く寝床に目をさまし 繪本の中の海をみてゐる

言葉の果てるところに羅馬があつた 波は人々のためいつまでも立ち去らなかつた

寝姿

室内楽Ⅲ

立像 (1936/3-7) 29

本をひろげる　もう雪は降りませぬ　シヨベルの音が冴え　断崖きりぎしだけがみえてくる

風が強すぎて　うしろ姿だけみえる　ランプつ灯けると寒くなるシイッだ

逃げてゆくのは　空だと知って　貝殻草の膝をして　雪の降る夜も待ってゐた

両頬ほほに泉いづみかくして　水仙すいせんがゆれてゐた

歌はないでゐた　前髪まへかみに夜明けよあけをかくし　中世ちゆうせいの川がはの流ながれたる寝姿ねざただつた

何も

も強つよひられるものはない　いつまでもベルベルが鳴り　枕まくらがとほざかつてしまふ

膝ひざの上に風かぜが立つて　また物語ものがたりりがつくられてゐる

一人四十首特輯

多すぎる願望のため、私の孤獨な精神は、人々の前にでると、常に途方にくれていた。私は「空をつくる家」に生れて、ながい年月を、そのやうに所在なく雪を降らせてきた。そして、私はもはや若くはない、ものものしい姿勢をしながら、流れに腕をしづめてゐる。私の學んだ政治學や經濟學が何故、こんなにささやかな歌をうたはせるのであるか、私はもすこしの間、いそがずに「序」を書いてゆかねばならない。

空つくる家の歌

十年……すでに松の花に歩を移した、川に身をつけて 劇しい波頭にちかづいてゐた。

その時すでに生涯を盗まれてゐた。空そらに咲く辛夷の花に わたしの齒があつた。

無明のはてに 寒い花をかたむけて わたしの落書は 乏しい父母の空をつくつてゐた

父は矜り高く日のをはりをうかゞふた 膝のあたりに 果てしなく瀧をみせた

爐の灰をかきながら ほのかな祖おやの火をぬすみ わたしも父の頭をもたげはぢめた

険けしい花のしぐさで たよりなく 私の食事に歸つてくる 母の言葉もあつた

包丁のはほはない 戸の外に高雅な皿をはこぶ音がして 母の哄笑が切なくはねかへる

まれにしか歌はない 母の膝の落葉模様 邊りに 雪のやうなものを降らせた

インク罎びんの中に雪が吹き込んでゐた 母の肖像のやうに 冬日の所在あきかをつくつてゐた

そむきながら 繪本をひらく 父子は俗な空なぞさぐりあつてゐた

一つの姿勢に狙はれてゐた くらい磴段の涯はたてるところにあびたゞしい日暮れの海があつた

垂れ髪は何もかくしてゐない わたしは鬼瓦にすがり リンゴ畑の夜明けを待った

はかなく待ち伏されてゐた 石の中の火のやうに。笛になつてゐる少年だつた

動悸のやうに蝶が飛んでゐた 花かげに帯をむすび わたしは空をみまいとした

何んでもなかつた 沓下の中に雪が入つてゐたと。悲しく母の髪の毛にかくれた

いたましく 睡りからさめてゐた わたしも毀れやすい空を シイツはしてゐた

曲々と燃えて 鶉の群がゆく もちと北の國へ 家族は雪の門をかついで行つた

荒々しく食事がをはる 菊花のほふ床に座り ランプの火屋むかしに古の空をあつめた

切なかつた、噴水塔のほとりをまわり も一人のじぶんの肩を 摑んでゐた

忘れないであた 食事のあるところに もののしく 冬空がおちてあただ

軒端に 烟硝のにはいがした 吹雪が過ぎてわたしの胸に 火のいるの鴉がのこつた
家具に影がなかつた きびしく疲れながら 母の足もとに雪崩があつた

飾るものはなかつた 眼かくしされて いつしか父の骨をにぎらせられた

意味なく刃物がひかる つひに別れねばならなかつた 少年の腫の奥に川がのこされる
かりそめの空を飾る ほろびかゝつた矜のあるところに 父の書をひらく

どの繪本にも海がひらかれ 古の風が吹き 卓子のむかふにありありと活火山がみえた

その肩にたち並ぶ言葉はなかつた 風の吹く蘆の間に 無方の空を近づかせたのだ

眼をとぢてゐる 疲れた川のやうに 寢床の中に剃刀をみせてゐた

槍のむくところには海があると 父は果てしない舌にまぎれ 生涯を川に結んだ

夜のはぢまるところは 泡立つ問答のかたちで 數多い道もはげしく陡つてゐた

残る海はなかつた 晴衣の心で 少年ははげしく 所在なく 刀をさげたまゝであつた

質すことはなかつた 飾間に雪が降り 父は佗びしく門の位置をかへてゐた

空缺をならし 日々父のしぐさのなかで わたしの體操のをりはなかつた

ふたゝび散る櫻はなかつた 父の言葉のやうに はかなく肩へ ふりかゝらなかつた

望むものはなかつた 人形をつくる父の手先から わたしは瀧のやうに立ちあがつた

手負ひのやうに どこかに耳だけのこして 海へ 或は晦澁な處へ 精神だけが出發する

けだものの眼には 一莖の花も映るらしく めいめいに刺の
ある崖をにらんでゐた 傷ついた人は瀧をうしろに 磔のあ
りかへ手をのべて 雪になつた明方へ ひとしきり聲をはな
してゐた

反歌

ふりかへらずに 空缺などならして 残雪ほどのたそがれも
ゆかねばならぬ

磁場 4 1935/04

語りあへばこの道も寒い瀧のやうだ 人は佗しく霧のきざはしを踏んで歸つた

磁場 6 1936/06

けさ梅の枝を折つて、鶴がとび立つ、ほのかな春の匂ひと雪明りだけが 私にのこる
雪はやんだ 人は乏しく繪本に集まり ひたすら ほど近い空を語り合ふのであるか

野づら 東北文学 (1935/10) 創刊号

凶作地通信

この河もあまり海に近づきすぎで 豊葦原瑞穂之國から流れくるとは信じられない

稲も柱も空にたゞきかへされ 山谷はいちめんにと 冬海となつてゐる

枯れた日まわりの根を踏み 帰つてゆく農夫らの乏しい肩先も この秋の落暉の的であつた

農民の子手をとれば枯れた稲の根とかほり ことしの秋の匂ひは 切ない

村で戸口は木枯しばかり 家の中にランプはあるが 人はくらく石の中に住んでゐた。

新らしい道

新領土 (1937/1-02)

やさしいあやまちを匿しあつて
切なく夜明けを歩くひとに

どの掌をすかしても空がみえた

●ちる青い手袋のうへには
も 若い杖が倒れたまゝ

く昔の雪を降らせる

風は何に向つて傷ついてゆくか

●ほく 寒い旗のみゆるところ
歸るひとはもうゐない

●らに花を流して

たちあがる瀧のやうに

いくつも道は果てゝゐる

●原本が切れていて判読不能

カツトグラスのやうな姿勢で
當世は

鶯の啼聲なども流行り

頭文字だけの町を通過する。

*

童女たちは海峡をもつてゐた。

あぢさゐの中で迷つたことを語り

鳩のとび立つ方へ杳をぬいだ。

*

紙風船のやうに歸れはしない

青空には古今集がひつかゝり

掌の中から螢がとび去る

*

口承者は瀧を仰いでゐる。

新しい骨を歌ふために

海のある高い道へいそいだ。

*

童女は氷を割つてゐる

透明な月がのぼりすぎるので

詩人たちも

菊花の階で劍を研いでゐる

*

下衣だけが明るかつた

ブルータスはまだ終らないか

平氏は

しるべない道に鏡をすゑた。

*

カタカナで歌つてゐた

日本の鉛筆を握る列子たち

しきりに翼をさぐりあつてゐる。

*

新しすぎる神話であつた。

大和歌はすべてのパラドアへ逃げ

水晶のやうに澄んでいった。

*

傳説は毛髪などを使用した。

鉄の呼吸なども

アツシリアの花を濡らしてゐた。

☆

下で

タンポポのやうに歌つた

すべての機械にとりまかれて

日本の石はゆれてゐた

*

貝殻草には海はひゞかない。

ランプの中の歌ごゑで

女たちは膝を失くしてゐる。

*

すぎる

花粉が頬に吹きつけ

海と肩をならべながら

はかない武器の位置をなほした

*

體操を抜けでるために

しきりに火薬をまぼしあつた。

虚しく海をうつす義眼も

義眼なども國旗になるね。

ときには国旗のやうに輝きだす。

*

海のやうに旅立つてゆく

童女の掌を握りあつて

鐵の花束が高くさゞげられる。

~~花のまは~~ 前夜 I 新短歌 (1937/01) 01 創刊号

何と呼ぶ勝利であらう 竹林に入り 河を出る 寒々とした眠であつたね
掌をひらくと 空があつた たやすく世界の肩がおちてゆくのであつた

どこかの空が一枚おちてくる 花を横たへて 峻しい喜びであつた

いくつもの扉ドヤの前に立つ 敗れてゐるのであつたが 流れることを知らない

どこから明るくなるのか 勝ち誇る切なさで 空の名をさがす

めいめいの空をつかひ果す 人々は 目をさましたところで 負傷してゐた

前夜 II 新短歌 (1937/02) 02

ランプに類した集り。何と象徴的な夜であらう 荒野から合唱がきこえてくる

手袋を忘れてきた。いたるところで剣の音がする 硝子のやうに笑つてみせる

いくところ。

~~越えぬものがない~~ 地平線はいくつもの国旗をかくしてゐる 鶯はもう鳴かない

肩をはずすと 白鳥がとび去る。 寝臺に散る李すももの花にも 火葉の匂ひがのこる

空が無い 逞しい左手だけが 青い林檎を握つたまゝ 花のやうに走つてゆく

やうに す

新聞紙のうえに 雪が降りしきる 何かを待たねばならない ~~照準を~~照準を合わせる。

氷の下で眠りから覚める。

いくつものカメラを向けられ

また絶望から~~非~~らない

立ちあが

々

人~~非~~はめいめい川を武器に移した。若い計画は 慌しく生涯を追ふのであった。

外字新聞 およ夜間飛行 国境では千人の老子が一つの道をつくってゐた。

青年らは砂漠をひきづつてゐた。明方の食事にはユマニストにラッパを鳴らさせた。

く昨日の

ゆれてゐた。

国境は霧の中にあつた。

寂しい~~非~~ コンミニケよ。

傷痕は花のやうに~~痛~~ましかつた。

構 圖

新短歌 (1937/04) 04

地平線が鉄のやうに鳴った。 日本の花の階^{きざし}で、少年は紙幣を握つてゐる。

誰の掌ででない。水時計のやうに佗しくて ニューズや地圖をみてしまふ。

戦のはなし、うつし繪の勲章ね。

日暮れになると 人形を抱いたまゝ目をさます。

どこからひきかへしたか。どの驛にも暮れのこる松の花や中村鎮の茉莉があつた。

石ばかり歌つて メカニクな庭にも ラスキンの羽根が見えるではありませんか。

古い銃聲がきこえる。利根逸男の哄笑か、白い歯の間から 多くの海をみせてゐる。

胸をそらした日々がすぎてゆく、水はすべてを盡して 空は花盛りです。

スマレの中にある海。働蜂も高く睡つて、少女は海泡のやうに頬笑んでゐる。

河もあまり高すぎて、風船の中は吹雪です。六条篤は蝦夷地の蝶を追ひかけてくる。

やさしい鴉がフオクにとまる。わたしはランプのやうに遅刻する。歸る日は崖のやうだ。

荒々しく皿がもち去られる。かたちを匿した扇。義足は派手なタンポポのやうに韻^{ふる}える

砂漠を追はれるほどのことはない。すべての機械の前で、少年は美しくなるばかり。

何事でもなかった。けふから雲の國。劍のやうに雲雀が啼いてゐる。

黄昏歌

新短歌 (1937/05) 05

睡つてゐる間に 多くの庭をすぎて 空にすてられた花束のやうに 切ない沐浴をした。
歌ひながら すべてが空へおちてゆく、きみも 野茨の藪で よごれた羽をかくした。
たれもかへらない徑で あてどなく目覺めてゐて 噴水のやうな夜明けだつたね。
時計がきこえすぎる。菊花の匂ふシイツの上で どの少女も銃剣を研いてゐたね。
約束をはつたね。たれの夢がさめたのか、どの空も地球儀のやうに佗びしいね。

黄昏歌

新短歌 (1938/07) 12

I
合唱鐘はもうきこえない、野茨の上の空を別れぎわのやうに 蝶々がとんでくる。
II
流れの底でほゝゑんでゐる、睡蓮ひしりんにかくれて かわらずに むかしの帯むすんでゐる。
III
霧に たれもかくれてゐない お伽噺のやうに遠い徑、藤の花だけゆれてゐる。
IV
たそがれがきて ランプのやうに顔を赫くする、浅い春に似て過ぎやすい歌うたごゑだつた。
V
ナプキンだけが胸にのこる まだ消えぬ雪のやうに、後姿して待つてゐる。

みんな違つてゐる夜 だれが何を無くしたかも知らないで はでやかに粉雪が降つてゐるばかり
 まぶしいばかりに迷つてゐる 夏花のやうに 傷つきやすく目覺めてゐる あなたは
 また昔の霧に立ちつくす むなしく何かを語りつゞけながら 道標みちしるべのやうに さまよつてゐる
 清らかに 切なく 別れを告げるひとのやうに まためぐりあつてゐる あなたも
 ここは明方なのか 黄昏なのか 何もかも無くしてしまつたマントの中で 何かを待つてゐる

追憶のやうに 新短歌(1941/01) 38

目をさまして 行きくれてゐる たそがれのやうに 粉雪の降る花のあひだに
 たれがとはいへず どこかで合掌のなかに隠れてゐる ほのかな火をさゝえながら
 夜のやうにさまよひ ひと知らぬ骨をあつめてゐる 姿もなく あざやかに
 どこへとはいへず いつまでも歸つてゆく 聖書のやうに 頬をかくしながら
 追憶のやうに はてしなく待つてゐるばかり つひに何かゞしりぞき終るまで

花のあひだに 新短歌(1941) 41

ほろびるほど咲いてゐる 狂はしく貴あてやかに堪へながら 呼びあつてゐる
 剣の音がひびいてゐる 誇りやかに 光のやうに 空しく何かゞ歸つてくるまで
 散りぎわのやうに憩へてゐる たれとも知らない夜に 優しく瞳めをさましながら
 待つてゐる何もないのに こたへてゐる 信じながら 夢のやうに身を投げてゐる
 飛び去つてゐる むかしの時のやうに 物語りのなかばで 血をこぼしながら

めいめいの霧の中に迷った　すぎてゆく花の數にどぎつきながら　離ればなれの道をつくった
みんな歸つたが　だれも歸りつかないでゐた　そこには空だけがいくつも　傷のやうに残つてゐた。
何處からどこへつなぎあつてゐるのか　風のやうに　いつまでも辿りつけないでゐた
みんなべつべつのことづけ　誰れにもきかれないで　むなしいまでにいそいでゐた
ひろい場所だった　みんなそこでおしまひだった　そこから風は出會ひのやうに立ちあがつてゐた

海　峡

新短歌(1941)46

早く来てしまった　誰れにも知られずに　そこでも　絶えやうとしてゐる　いくつかの風景がつゞいてゐた

耐へるたびにひとりだった　みんなちがつてゐる果無さのなかで　とほい返辭だけしてゐた
いつまでも逃げる姿勢をしてゐた　海に向つて　そこでは　何もかもすぎやすかつた
歩いてゐるところだけ吹雪いてゐた　昨日と同じに　誰の傍へも行きつかないでゐた
とどまつてはゐない　断崖のやうに切なく息をして　狙ひながら　狙はれてゐる疾さであつた

落葉林にて

新短歌(1941/11)47

たたずめば何もかも遠くなつて　かなしい記憶のやうに　さまざまな林道があつた
何へ歸つてゆかうといふのか　めいめいのうしろで　忍び泣いてゐるやうに
虚しさを呼びあひながら　どこまでついてくるのだらう　空のやうに汚れやすくなつて
はぐれながら　駈けてしまった　すべてを捨てるときのやうに　ひとりであつた

何ごともない　背をむけながら耐へてゐるだけ　みんな滅びるやうな高さになつて

その道

新短歌(1942/06)53

その道をいつも去つていった 何しにとはいはず 散りしく花を越えながら みんな耀きながら何か
に絶えてゐる

近づいてまた遠ざかる 『けふよりはかへりみなくて…』と たまはりし命のまゝに 頬ふく風もい
まはない

呼ぶものはもうない べつべつに遠いところをすぎる 歸るときを知らずに いつまでもその道をさ
まようてゐる

哀歌

新短歌(1942/7-6)55

その道を問はないで 去る ふたゝびかへらないと つたへるものもなかつたのに

その霧のなかにかくしてきたいくつもの別れ 距りてなほ盡きぬ哀しみと歎びであつた

きこえてきたのは すぎてゆくものの音だけ ゆきまどひとつ つひに歸らぬ徑であつたが

火の山

新短歌(1943/02)61

遠のくやうに ふたゝびかへつてくる時雨 ふりかへると 私のなかにもさまよつてゐる 悲しい火
の山よ

いつまでも野菊にほい 時雨の黄昏にまぎれる 物語りの手をふつたまゝで そのひとも

梅鉢草のもやの中にも 遠い日の袂がゆれて 果てしないものに盡しあつてゐる 今は

いまはもう虹のやうな距り いくつもの横顔だけがゆれ 名もない別れを堪へてゐる

灰は降る 霧のやうに 髪のうちへに 誰れもゐない頬をぬらして 清らかになつてゐる

古い風

村上圭右、南猛に

(新短歌 1952/03) 43

はてしない春の日 椅子の上に落葉を拾う 悲しくカミソリをとぐ
何かを失くし ランプをつける 風はすでに古く コップは空だった
立ち止ると迷うのだ 中空にさだからぬもの残り むなしくいそぐ
いくつものはなやかな地平線につまづき 追われるときノドはなかつた
花もけだものもなく 老いてはじめにかえる 灰のように何かもゆる日

哀歌

(出帆旗 1942/6-3)

はぢめも をはりも知られずに 雪がつくる 切ない物語りなのに
どこまで さまよつてゐるのか ふりしきる粉雪に かなしく剣をかくしながら
呼んでゐる たしかに吹雪のなかにゐて 遠のきながら はしつてくるのは
幕のむかふで 出會つてゐる 炎のやうにくづれながら あなたも
とどまれば むなしい問と答 せつなく寄りそひながら 別れてゐる

雪の日

(出帆旗 1944/8-2)

1 征くひとの靴のあと さだめなく降りしきる雪。堪へて 踏みしめてゐる。
2 手を振れば そこにも降つてゐる細雪 遠い日の 黒いマントに眼をどぢる。

3 黄昏をゆきまどひつつ降つてゐる雪 ひた走る電車のきしみ 頭髪白く さりげなく別れる。

基地抒情

(防人 1944 / 08/01)

在りし日の佐藤忠重二飛曹のために

夜明けの冷たい距離計の底を羽搏いていった海鳥、かへらなかつた風景の破片きれはしのやうにとほくとほく。どのガラス窓も寒く 海圖のやうに荒海をかくしてゐた。粉雪の吹き込む床の上に飛行機の寫眞があつた。

機銃がちかちかしてゐた まつ白い野がいくつつも走つた。そのとききみもぼくも巖いわのなかへ突き進んでゐた。